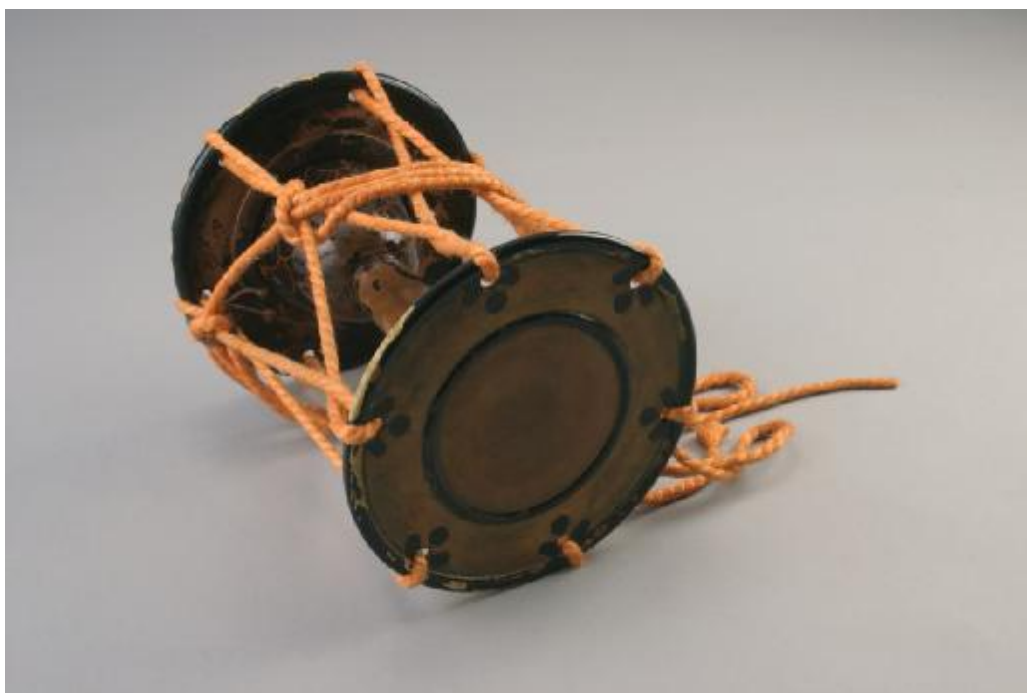


平成 28 年度 年報



砂川捨丸師 鼓

大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

平成 29 年 3 月

目次

1	ごあいさつ _____	1
2	これからの上方演芸資料館のあるべき姿について（鼎談） _____	2
3	大阪府立上方演芸資料館運営状況（平成28年度） _____	7
4	新しく開架した資料 _____	9
5	上方演芸の殿堂入り _____	10
6	所蔵資料の紹介 昭和十一年十月改正「東西浪界大見立」 _____	11
7	あとがき _____	24



表紙の写真

平成元年、砂川捨丸師が60年間愛用した鼓が大阪府知事に贈呈されたのを機に、上方演芸資料館の設立に向けてスタートした。

ごあいさつ

大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方は、設立 20 年の節目を迎えることができました。日本で唯一の「笑い」の資料館は、資料の「収集」、「保存」はもとより、展示室や、演芸ホール、レッスルルームを備えた施設としてスタートしました。

現在は、大阪府市文化振興会議のアーツカウンシル部会から頂いた提言を踏まえ、大阪府が直営で運営しながら上方演芸の情報発信と、府民の皆さまから託された約 7 万点の貴重な資料の整理分類に取り組んでいるところです。今後、府民をはじめ幅広い人々が活用していただけるよう、データベース化等にも取り組んでいきたいと考えています。

また、平成 28 年度は本館設立の 20 周年を記念して、中之島図書館等、府内 3ヶ所において、巡回展示を実施し、多くの府民の皆さまにご好評を頂きました。来年度も巡回展示を実施してまいりたいと思います。

本報ではこうした平成 28 年度の本館の取組みについて、府民の皆さまにご紹介させて頂き、本館についてより理解を深めて頂けましたら幸いです。

館長 齊藤 洋一

これからの上方演芸資料館のあるべき姿について

[鼎談]

- 追手門学院大学笑学研究所特別顧問、関西大学名誉教授 井上 宏

- 梅花女子大学名誉教授、上方芸能史家 荻田 清

- 大阪府立上方演芸資料館 館長 齊藤 洋一
(大阪府府民文化部都市魅力創造局文化・スポーツ課参事)

(齊藤館長)

本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

さて、上方演芸資料館が平成8年11月に設立され、今年で20年という節目の年を迎えている訳でございます。この20年間、当資料館を取り巻く環境は、大変大きく変化しました。

現在、資料館には、府民の皆様から寄贈して頂いた約7万点の資料を保管しており、資料館にとって最もコアな部分である資料の整理に鋭意、取り組んでいるところです。

そこで、本日は、資料館設立準備の段階である基本構想の取りまとめからご尽力いただいている元上方演芸資料館館長でもございます井上先生、それから、資料館が所有している資料の整理にご尽力いただいている資料整理部会長の荻田先生に直接お話を伺いし、これからの資料館の目指すところといたしますか、上方演芸という大阪が誇る文化をどう後世に伝えればよいのか、そのためには、今後資料館がどのような役割を担っていくべきかについて、鼎談形式で、ご意見を頂戴できればと考えております。

それでは、資料館に大変長く関わってこられた、井上先生からお話しいただきたいと思っております。

井上先生、よろしく申し上げます。

(井上先生)

初めて私が、上方演芸保存振興検討委員会の構想を聞いたのは、フルブライト委員会からの招聘教授としてアメリカの大学に出向いていた平成元年の時でした。当時は、生活文化部の文化課だったと思いますが、府職員の方から直接アメリカまで電話を頂いて、「帰国したら検討委員会の会長をやっていただけませんか。」という内容でした。事情はよく分からないままひとまずお受けして、詳しいことは帰国してからということになりました。

(荻田部会長)

あまりにも突然のお話だったんですね。さぞかし驚かれたことでしょう。

(井上先生)

その時は本当に事情がよくわからないということが率直な思いでしたね。もともと演芸関係に興味があったのは事実です。昭和50年代中頃の漫才ブームが来る前のことだった

かと思えます。昔の「なんば花月」（現在の「なんばグランド花月」）は、千日前にあったんですが、劇場は閑散としていて、ほとんどお客さんが入っていませんでした。あの実力者と言われた「ダイマルラケット」さんでもお客さんが入らない。そういう心配した時期があったんです。そんな時代で、秋田寛さんが若手漫才の育成を目的に「笑の会」を立ち上げて頑張っておられたが、昭和 52 年に亡くなられ、その翌年の 53 年に私が世話役をして「笑学の会」を立ち上げ、同年 9 月に「中田ダイマル・ラケット爆笑三夜」を主催しました。「上方お笑い大賞」や「上方漫才大賞」などの審査委員を長く務めたり、上方演芸には関心が深かったですね。

（齊藤館長）

なるほど、上方演芸の世界に非常に深く関わって来て来られた訳ですね。そして何よりも演芸がお好きだった訳ですね。

（井上先生）

まさか会長を頼まれるとは思ってもなかった。以前から、私は上方演芸関係の資料を残すためには「これは誰かがやらなあかん」と強く思っておりましたので、このお話しがあった時、お引き受けいたしました。

（荻田部会長）

「資料は遺産として残して置きたい。残しとかないかん」そんな強い思いがきっかけになったんですね。資料館の目的にある「上方演芸を後世に残す」というコンセプトは、まさに、上方演芸に関わってきた人々の思いであり、上方演芸を愛する府民の思いそのものだと思います。

（井上先生）

それから帰国して、基本構想の話聞いたとき、当時は、この構想は実際に動くんだろうか。本当に半信半疑な気持ちでした。しかし、資料館を作るんだという当時の府職員の熱気はとにかくすごかった。とにかくやる気十分で、これなら本当にできるかもしれない。そんな気持ちになっていきました。

（荻田部会長）

上方演芸は、大阪独自の文化。日本で唯一ここにしかないもの。その資料館をつくる構想というのは、本当にドラマチックで、一大プロジェクトだったと想像できます。在阪の放送局や芸能プロダクションさんをはじめ、オール大阪としての支援を受け、みんな進めて来られた。

（齊藤館長）

関係者の方々のいろいろなご支援とご苦勞があって、上方演芸資料館の設置が実現した。そして、上方演芸の文化を内外に発信する拠点となっていった訳ですね。

（井上先生）

資料館をつくるのも大変でしたが、またそれ以上に資料館を運営していくということも相当な苦勞がありましてね。初代館長は、放送局 OB の演芸プロデューサーの方でした。オープン 1 年目は、珍しいということで、府内はもとより全国から大変多くの方々に来ていただきました。しかし、徐々に入館者数が減少して、私が館長になった時には、「何とかして入館者数を増やさなあかん」といったことが課題になっていました。大阪市交

通局さんとの連携や、修学旅行生や団体客誘致のための取り組みなど、あの手この手でいろいろなことに取り組みました。

当時のワッハ職員も、デスクワークから離れて、南海難波駅や道具屋筋商店街まで出て、資料館リーフレットと割引券をセットで、ビラ配りを行ったこともありました。

(齊藤館長)

資料館を運営するにも相当のご苦労があった。そして、紆余曲折があつて、今の資料館につながっていく訳ですね。

(井上先生)

展示室の入館者数以外にも、当時、ワッハホールという 300 席くらいの演芸場がありまして、「貸館事業」を行っていたんですが、その稼働率を上げることも課題でした。

300 席のホールというと、一般の方々や若手の芸人さんが、演芸をやろうと思っても、なかなか難しい。だからまだ借り手が少なかったんですね。

私が館長として来た時には、これは、初代館長のアイデアだと思うんですが、在阪の芸能プロダクションに協力してもらって、各プロダクションが、交替しながら普通の寄席のように演者と演目を決め、有料で興行するという形をとっていた。そして、その空いている日程を一般に貸し出していました。ワッハ独自の自主事業もやりましたが、とにかく「入館者数」や「稼働率」を上げる。それが、資料館の課題になっていた訳です。

(荻田部会長)

なるほどよくわかります。府の財政的な面では、やはり税金を投入して施設運営を行っている以上、それに見合った収益を上げていくことも当然求められますからね。ただ、資料館の目的は、あくまで「上方演芸を後世に残す」という使命だったと思うんですが、そこはどうだったんでしょうか。

(井上先生)

収集資料が増えていくことは本当にありがたいことでね。多くの方々から資料を寄贈してもらいました。ただ、その一方で、「入館者数」や「稼働率」に多くの力を注いだ結果、どうしても資料整理が後回しになりました。

(齊藤館長)

施設運営に力を取られて、資料整理まで追いつかなかったんですね。

(井上先生)

当時は、資料整理を行っている職員は演芸に詳しいということはあっても、学芸員資格は持っていなかったんです。私が館長になって、まず、最初に大阪府にお願いしたのは、資料館には、資料を専門に扱える常勤の学芸員が必要で、その配置をお願いしますということでした。

(荻田部会長)

資料整理に学芸員資格を有するものを配置するのは、当然ですね。その体制が、当時はまだ未整備の状態だったんですね。学芸員が資料整理を計画的に行い、資料の調査・研究について、責任を持って取組んでいくこと、それが展示などへの資料活用へつながる訳ですから大事なことです。

(井上先生)

大阪府との交渉の末、学芸員資格を有している者を1名配置することができました。そこから資料をデータ入力していく基本的な作業が始まったんです。

(齊藤館長)

そこからの作業はどのように進んでいったのでしょうか。

(井上先生)

作業開始当時、既に膨大な資料があり、資料を整理、調査して、意味のある情報にして入力を行っていくには、学芸員一人では大変なことでした。

そこで、アルバイトを数名雇って、学芸員を中心に、皆で手分けして資料整理を進めていくことにしました。しかし、作業員が入れ替わっていくうちに、入力情報の統一が乱れ、資料の名称や演者の読み方などに違いが出て、統一した検索に問題が生じるというようなことが起こり、誤った情報も登録されてしまうとか、努力しつつも、結果的にはそうなってしまったんですね。

(齊藤館長)

大変な時代だったと思います。だから今こそ、このタイミングで資料整理をきっちりやろうというところに繋がっていく訳ですね。

(井上先生)

私は、館長を3年間勤めましたが、3代目、4代目の館長もそうだったと思うんですが、結局は、資料整理よりも「入館者数を増やさなあかん」というところに落ち着くのかな。そういうプレッシャーがいつもある訳です。そうすると展示ではどんな企画をするのか、劇場でどんなイベントをするのかということが重要になってくるんですね。

(齊藤館長)

平成18年度から平成22年度の4年間、NP0法人が資料館初の指定管理者を受託しましたが、入館者数増はこの時代の最大ミッションというところに繋がっていく訳ですね。

(井上先生)

まさに、イベントの企画を重視した体制だったのかな。入館者数を増やすためには、最も効果的な手法だと考えられたんでしょう。

(荻田部会長)

いろいろと紆余曲折を辿っていますが、やっぱりこれだけ資料が蓄積された訳で、あの資料は宝ですよ。「この宝は何としても残さなあかん。」府民から府に委託された訳ですから、責任を持って資料を「守っていかなあかん」と思います。

(井上先生)

荻田先生のおっしゃるとおりだと私もそう思います。落語とか漫才、上方演芸は、大阪人にとって心のふるさとなんですよ。大事なんですよ。その事に気が付いて、やっぱり大阪は、寄贈頂いた資料を自分たちの手で、文化遺産として残して、活用を図っていく。そのことが最も大切なんですよ。

(荻田部会長)

私がお大阪府からの要請を引き受けた理由について少しお話しますと、ホール等を閉じて、残ったのはこのライブラリーと収蔵庫だけと聞いたとき、今が資料整理のチャンスだと考えました。今が「資料を整理するには一番いい環境」ではないかということで、

お引き受けしました。資料整理には、学芸員1人に加え、台本や書籍関係が非常に多いことからその専門家である司書を1人配置して進めており、棚卸しはほぼ終了することができました。来年からはそろそろ活用方策も検討できればいいと思っています。

そして、将来的には、この資料館にある資料をより多くの府民にアピールできるような環境を整備したいと考えています。

(井上先生)

私は今回、荻田先生に資料整理を担当していただいたこと、非常にありがたいと思っています。先生みたいな人がいなかったら、宝は持っているけど、その活用まで話が進まなかった。その絵を描いてくださったことは、すごくありがたいことで、資料整理が終われば、活用考えないかんですよ。

(齊藤館長)

本当にそうですね。資料を活用することは、大阪府に資料を寄贈された府民の願いであり、府の責任でもあります。

最後に今後の資料館のあるべき姿について、井上先生、荻田部会長から、一言頂戴したいと思います。

(井上先生)

上方演芸の歴史は遡れば江戸時代、元禄の頃まで遡れます。300年以上もの繋がりがあって、今日もそれが受け継がれているという事実は大きい。この流れを見落としてはいかんですよ。この流れは、ある世代がまったく見逃してしまうと切れてしまう。だから、この宝を資料館で保存し、活用を考えて、みなさんに知っていただきたい。まさに世界の人にも来てもらって、楽しんで、評価していただきたい。それだけのパワーをこの宝は持っている。大阪人の生き様であり、魂が込められているんです。

(荻田部会長)

過去のいろいろな経緯はある訳ですけども、反省すべき点は反省すべきと思いますが、今できることは何なのかという、一歩一歩足場を固めながら先に進むしかないだろうと思います

情報発信にしても、まだまだやらなければならないことがたくさんあります。

これからの資料館に求められているものという、これまで、上方演芸資料館に対して期待もし、興味を持ってくださった人たちが、期待を裏切られたというか、信用を失った部分があると思うんです。それを回復していくことによって、資料のさらなる充実、信頼して資料を寄贈してもいいと思えるような資料館にしていくことだと私は思っています。

(齊藤館長)

本日は非常に貴重なご意見を頂戴し、ありがとうございました。今後の資料館の運営にあたり、是非参考にしたいと思います。

大阪府立上方演芸資料館運営状況（平成 28 年度）

■来館者数 14,888人

■映像音声資料視聴上位 10 点

タイトル
てなもんや三度笠 爆笑傑作集 1
蔵出し名作吉本新喜劇 花紀京 岡八郎 泥棒と鈴／恋の売上税
蔵出し名作吉本新喜劇 花紀京 岡八郎 だら猫物語／夢ロード
20 世紀名人伝説 爆笑!! やすしきよし漫才大全集 ①
なつかしの昭和爆笑漫才～天国に笑星～
蔵出し名作吉本新喜劇 花紀京 岡八郎 スリ貴族／究極の結婚式
お笑いネットワーク発 漫才の殿堂 中田ダイマル・ラケット
松竹名人会 第二集
てなもんや三度笠 爆笑傑作集 5
よしもと栄光の 80 年代漫才第 1 巻（横山やすし・西川きよし）

■演芸ライブラリー（紹介）

タイトル		
第 1 回	『四季を感じる ～2016 春～』	4 月 1 日～15 日
第 2 回	『四季を感じる演目（浪曲）』	4 月 16 日～30 日
第 3 回	『漫画で落語を紹介』	5 月 1 日～15 日
第 4 回	『吉田留三郎』	5 月 16 日～31 日
第 5 回	『落語散歩』（なんば周辺）	6 月 1 日～15 日
第 6 回	『女道楽』	6 月 16 日～30 日
第 7 回	『怪談特集』	7 月 1 日～8 月 30 日
第 8 回	『にわか 一輪亭花咲』	8 月 31 日～9 月 30 日
第 9 回	『落語 聴き比べ』	10 月 1 日～31 日
第 10 回	『新花月』	11 月 1 日～30 日
第 11 回	『旅する落語』	12 月 1 日～1 月 31 日
第 12 回	『足立克己』	2 月 1 日～28 日
第 13 回	『芸人たちのてんのじ村』	3 月 1 日～31 日
小展示	『落語演題見立番附』	10 月 22 日～3 月 31 日

■館外展示会

目的：ワッハ上方の設立とともに制定された“上方演芸の殿堂入り”が、平成 28 年度で 20 回目を迎えることから、「ワッハ上方と上方演芸の殿堂入り」と題し、上方演芸の殿堂入りを果たした歴代の演者に関する資料を展示し、府民に上方演芸に親しんでもらう機会を提供するとともに、ワッハ上方の PR を図った。

場所：府内 3ヶ所（大阪市北区・中央区、東大阪市）

場所	時期等	会場風景
大阪府立 中之島図書館 （大阪市北区） ※展示室（3階）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 8月19日(金)～30日(火) ⇒12日間 ・ 来館者数 1,582人 	
なんばグランド 花月（NGK） （大阪市中心区） ※吹き抜けロビー （2階）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 12月26日(木) ～1月31日(火)⇒37日間 ・ イラストパネルのみ展示 ・ ホール入館者数 100,870人 	
大阪府立 中央図書館 （東大阪市） ※企画展示エリア （1階）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月20日(金) ～2月12日(日)⇒24日間 ・ 来館者数 932人 	

新しく開架した資料一覧

(タイトル 50 音順)

井上宏の見—つけた！笑いとユーモア	井上宏 著
上方漫才黄金時代	戸田学 著
上方落語流行唄（はやりうた）の時代	荻田清 著
草や木のように生きられたら	笑福亭松之助 著
崑ちゃん ボクの昭和青春譜	大村崑 著
食満南北著「大阪藝談」	食満南北 著
初代桂文治ばなし—「桂」の始祖・初代桂文治歿後二百年	四代目桂文我 著
肥田せんせいのなにわ学	肥田皓三 著
米朝置土産 一芸一談	桂米團治 監修
米朝らくごの舞台裏	小佐田定雄 著

上方演芸の殿堂入り

上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人さんがあまたおられます。大阪府立上方演芸資料館では、時代を代表する演芸人の方々の功績や魅力を後世に伝えたいと考えています。

「上方演芸の殿堂入り」とは…

上方演芸資料館では、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛し親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」名人を決定しています。これまでに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど 53 組 82 名の方々が受章されています。

また、第 20 回目を迎えた平成 28 年度は、三代目桂春団治さんと二代目春野百合子さんが受章されました。



第 20 回 三代目 桂 春団治



第 20 回 二代目 春野 百合子

(画) イラストレーター成瀬國晴氏

昭和十一年十月改正「東西浪界大見立」

荻田 清（資料活用検討委員会委員長職務代理兼資料整理部会長）

一、浪曲の見立番付

江戸時代後期から、相撲番付を模し、人物・物品などを位付けして多数並べる「見立番付」が流行った。その代表は歌舞伎役者を並べたもので、毎年何種類か出ていた。正確さに不安は残るが、意外な情報を示してくれることもある(拙著『上方板歌舞伎関係一枚摺考』などを参照されたい)。芸能関係はもちろん、各種の人名・事物・ことばを並べ立てた見立番付も多数出ていた。また、そうした見立番付を集めて冊子としたものもあった。江戸時代の大阪では『浪花みやげ』が有名であり、近代に入っては『物識天狗 番附百種』（大正二年、改正増補卅六版、岡本増進堂）などもあった。

ところで、浪曲の見立番付はどうであろうか。筆者も関心をもって、収集に努めてはいるが、その全体像は把握できていない。浪曲が流行しだす明治中期には出始め、昭和40年代まで出されていたと思われる。参考までに筆者架蔵の番付でいうと、明治45年のものが最も古く、昭和43年のものが最も新しい。正岡容著『日本浪曲史』には、明治25年代という「東京浪花節競」が紹介されている。

上方演芸資料館には三枚の浪曲見立番付がある。一枚は昭和11年10月改正「東西浪界大見立」、二枚目は昭和35年改正「全日本浪曲技芸士番附」（声明社版）。三枚目は二枚目とほぼ同じで、裏の大相撲「優勝力士一覧表」が33年秋場所若ノ花までとなっており、34年版と見なされる。このうち、一枚目は筆者の見るかぎり、見立番付としては非常に資料的価値が高いものと判断されるため、この一枚を詳しく紹介しておきたい。



大きさは、縦55.0cm×横79.3cm。現況は裏打ち表装されている。図版を見ながら説明を加えていくと、まず中央上部に「昭和十一年十月改正/東西浪界大見立/天下一品浪界大勢早わかり」とあり、枠の下側は義士伝にちなんで討ち入り衣装の模様となっている。太枠の外には「蒙御免」の文字を挟んで、実力派人気者22人の写真、枠の下側には女流12人の写真がある（破れの部分は春野百合子と思われる）。

太枠の外側に細枠の一行が左右にある。相撲番付に倣って右が東（関東）、左が西（関西）ということになる。東の一行は、「別格 大和軍歌の創始者 ちぬの浦孤舟」「明星 義士伝 春日井梅鶯」「大家 義士伝 桃中軒如雲」「東方総裁 東京浪花節協会」。西の一行は「別格 義民伝 京山小圓」「名家 伊勢夫改 五代目中川伊勢吉」「名家 二代目藤川友春」「西方総裁 浪花節大阪親友派組合」。さらに東の外側には「著名支配人と営業主任」28人の名前があがっている。

西のさらに外側には「発売元 大阪市浪速区河原町二 浪花興行社内 大日本浪花節審査会本部 電話 戎五八八六番」「定価一部 貳拾錢一郵税貳錢」とある。見立番付として、これは非常に異例のことなのである。古来、見立番付は当事者・関係者には不満の代物で、別名「むかつき番付」ともよばれた。そのため、苦情・紛争を避けるために「次第不同」と断り、次編での改正予告を載せたり、あるいは板元・編集者をまったく載せないという、無責任なものが多い。それなのに、この見立番付では定価を記し、発売元の住所・電話番号まで明記している。

中央、相撲番付では行司や勧進元が記される部分を見てみよう。「寵将 佐渡情話 寿々木米若」「巨豪 本能寺 酒井雲」「巻頭 桐一葉 吉田奈良丸」。二段目は女流が並ぶ。「横綱 杉野の妻 天中軒雲月」「横綱 佐倉曙 京山小圓嬢」「元勲 赤穂浪士 富士月子」「元勲 馬場大盃 春野百合子」。演者を傷つけない、位付けを曖昧にする工夫もされており、横綱は何人も出てくる。「元勲 春日局 鼈甲斎虎丸」「元勲 乃木將軍 東家楽燕」「二代目奈良丸 吉田大和之丞」。

そして、中央最下段に「勧進元」として「南地愛進館 井谷政義」「花月 吉本」「天満国光 原盛千代」とある。廣澤瓢右衛門の「長講瓢右衛門夜話 天満(國光) 松島(広沢館) 溝の側(愛進館)」(『藝能東西』第8号)によれば、国光・広沢館・愛進館が浪曲師憧れの檜舞台であった。そのうちの広沢館は、大正8年5月に吉本に売却された(『藝能懇話』第16号。『吉本八十年の歩み』では大正10年とする)。昭和11年当時としては、国光・吉本・愛進館となるのである。当時の浪曲を支える興行場が「勧進元」として並んでおり、この見立番付の信憑性を高めている。と同時に、この見立番付が関西に傾いたものであることも表しているといえよう。

この見立番付のもう一つの特長は、活字を使用せず、歌舞伎の勘亭流風の文字で記されていることである。古い時代のものには手書き風の見立番付ももちろんある。筆者架蔵のものでは、明治45年3月調査「大日本浪花節奨励会」、大正元年8月大改正「大日本浪花武志大番附」などは、すでに活字の普及している時代でありながら、わざわざ手書きの味を残している。今日の印刷技術では、文字の大きさ、太さ、微妙な字間を自在に表現することができるが、当時の技術ではむづかしかった。大正2年5月「大日本浪花節太夫大

見立」(大阪・杉岡文楽堂)の活字の見立番付をみると、文字の大小は活字の大きさでつけているものの、太さは変えることができていない。組み方の苦勞がしのばれる。はじめに述べたように、見立番付の歴史は古く、もともと活字で組むことなどは想定していなかった。昭和11年のこの一枚は、文字の重厚さ、枠外写真のセピア色と墨色の二色摺の対比が際立ち、今日の見方としては、活字印刷よりはるかに勝って美しい。

勘亭流そのものも時代の変遷、書き手の交代により異なるものであろう(気にはなりながら、本気で調査したことはない)。当時大阪に居た勘亭流の書き手に依頼したものであろうか。歌舞伎を意識したところに、浪曲が目指した、社会的地位の向上の意図を見て取ることもできよう。

しかし、見立番付にありがちな、故意か不注意か、名前の重複はこの一枚にもみられる。西方三段目に廣澤駒千鳥が二度出てくることなども、指摘せざるをえない。

二、上方演芸資料館殿堂入りした浪曲師

上方演芸資料館の殿堂入りは、平成28年11月末日現在、51人(組)。そのうち浪曲師は4人いる。その人たちは、昭和11年のこの見立番付ではどこに位置しているのか。

○三代目吉田奈良丸

まず第一回に選ばれた三代目吉田奈良丸は、中央上段に「巻頭 桐一葉 吉田奈良丸」と出てくる。「巻頭」は、かつて歌舞伎の役者評判記でも使われた用語で、第一位と同じ意味をもつ。昭和4年に師匠二代目奈良丸から譲られて三代目を襲名した人。師匠は吉田大和之丞の名で、中央三段目元勲として出ている。得意演目としてあがる「桐一葉」は坪内逍遙の原作で、歌舞伎で上演された作品。豊臣家への裏切りを疑われて大阪城を去る片桐且元の苦衷を描いたもの。筆者は浪曲で聞いたことはないが、おそらく本筋は替わっていないと思われる。

『浪曲 芸術家集』(東京・大日本浪曲光栄社)、手元の本は第四号(昭和13年4月発行)であるが、その説明を書き写しておこう。

天下一品とは何を以つて云はしむるか 只単に芸道計りが優れて居るのではなく 男が良くて愛嬌があり 芸道に於ても声節話三拍子揃つて人並優れた芸術家は萬人中の一人であろう。其芸術と優秀なる人格の持ち主たる三代目奈良丸をして云はずはならぬ 得意の読物は勸進帳 桐一葉 神崎東下り 義士伝などは自他共に許す浪界の霸王として天下無敵の最高峰である 第二の浪界維新を目ざして 佐野の鉢の木 伊井大老以下十二篇の新脚本の発表によつて 嶄新な演出と清新な読物を以つて近代大衆に獅子吼せる様は 実に日本芸苑の誇であると同時に浪曲の飛躍芸術の革命であろう (漢字は新字体に直し、適宜一字アキを入れた)

この本では写真付きで説明文を載せているのは21名。そのうちの一人である。

○梅中軒鶯童

三回目に選ばれた梅中軒鶯童は、西一段目の左端に「横綱 紀文大尽 梅中軒鶯童」と出ている。紀伊国屋文左衛門の成功、吉原豪遊を描いたものを戦後も得意としていた。自身に『浪曲旅芸人』の著書もあり、周知の人であろうが、やはり昭和13年の『浪界 芸

術家集』第四号の説明を記しておく。

独立独歩で八歳の時真打としてかつがれ 中国四国地方を征服して最も天才児との好評を受け 現今では独特の鶯童節を天下に鳴らしめ 日本随一の節廻しで有ると 当業者よりの噂さえされて居り 最近各地に於ては 我れも彼れもと合同営業をして居る中を 鶯童の人気を見よと計り一枚看板で各地共打ち通して 多数の客を引いてゐるが 流石に芸の力は大したものだ 昨年末の大阪親友派総出演大会の際に病気で倒れて休演したので 満場の客は大さわぎをしたと云ふが 彼れの人気はおそろしい程である

○京山幸枝若

四回目に選ばれた京山幸枝若は、この見立番付には出てこない。この人は「両親が浪曲師で少年時代から巡業生活を送る。昭和一二年(1937)京山幸城に入門、翌一三年、幸城が軍隊に入隊したため初代京山幸枝に預けられ、一六年に幸枝若となる」(『日本芸能人名事典』)。なお、はじめの師の京山幸城は、この番付の西二段目前頭に、京山左幸枝の左に出てくる。後の師京山幸枝は当時の大立者。西一段目のはじめに「横綱 会津小鉄 京山幸枝」とある人である。

幸枝若は戦時中徴用され、戦後は地方巡業、大阪に戻ったのが昭和30年という(芝清之編『東西浪曲大名鑑』)。戦前の浪曲専門館での活躍というより、戦後、寄席の中で浪曲の地位を確立した人であり、歌を交えた幸枝若ショーの人気、河内音頭のレコード化などの評価であろう。

○富士月子

第六回に選ばれた富士月子は、中央二段目に「元勲 赤穂浪士 富士月子」とある。この時代の浪曲は、忠臣蔵物がまだ大きな存在であり、この見立番付では単に「義士伝」と出るほか、種々の表記がみられる。見立番付の昭和11年10月の頃、この人は満38才。すでに初代春野百合子(二代目の母)とともに、「元勲」と称されている。『浪界芸術家集』は次のようにいう。

名門葉室の家に生れて女学校時代より浪曲にアトラクションを持ち 後退くや遂に意を決し浪界に身を投じ 独流の名を挙げた 彼れは関根の義心 沓手鳥孤城落月などの新作を発表し 麗明な節調と豊潤な演出によつて 独自の境地を開拓しつゝあり 今や浪界の女王として大衆渴仰の的である 亦浪界稀に見る教養と美貌の持主にして 実にや典麗風雅な襟度は何人も讃歎してやまないものがある 月子独特の芸術は他に追隨を許さない

なお、番付中央二段目は天中軒雲月(二代目、のちの伊丹秀子)、京山小圓嬢(初代)と富士月子・春野百合子と並んでおり、女流の実力者を据えた位置といえよう。

三、気になった浪曲師

その他番付の一人一人を見る余裕はないが、詳細は付録の活字翻刻の一覧を参照されたい。ここでは、関西にやや傾くことをお許し願ひ、筆者の関心に基づいて拾い読みするこ

とにする。

○岡本玉治のふらふら節

西方の一段目、横綱「会津小鉄 京山幸枝」のあと、大関は「藪井玄以 日吉川秋水」、関脇は「奥州奴 日吉川秋斎」、関脇「伊達騒動 廣澤晴海」と、滑稽読みで知られる演者が並ぶ。このあたりに関西浪曲の特徴がよくあらわれているが、さらに左に目を移すと、枠を設けて「大阪名物フラフラ節 浪花五人男 岡本玉治」が目につく。位付けに相当するところに「大阪名物フラフラ節」とあるのである。滑稽読みの極致をいったと言える人であろう。口演の中で客に話しかけ、軽やかな節で楽しませたという。

『日本芸能人名事典』は、簡略ながら次のように説明する。

明治二七(1894)一昭和四三(1968)五・三一 大正・昭和期の浪曲師。大阪出身。本姓は黒田。岡本鶴治の弟子で、フラフラ節の玉治といわれ、滑稽読みとして人気があった。温厚な人柄で「関取千両幟」などを得意とした。

筆者は生の舞台を知らないが、芸能評論家・研究家だった林喜代弘氏が絶賛した人だった。『藝能東西』に林氏が連載した「なにがなにしてなんとやら」の三回目(続寄席読)の中で、「(登場人物の)夫々の性格と情念の機微が緻密に語り分けられ、玉治のかるやかな節調に詩情が馥郁とかをり、藤川友春とは別の風味がうかがへる、実におもしろい浪花節である」という。NHK ラジオで放送された「語り芸の世界」(放送日未調査)を、林氏から聞かせてもらったことがある。玉治の「木津勘助」を流して、聞き手の熊谷富夫氏との応答の中でも、実に楽しい、大阪らしい浪花節の味を解説していた。滑稽読みの歴史を語る時、真っ先にあげねばならない一人であろう。

○一風亭柳雪

西方関脇まで触れたが、小結には「大塩政談 一風亭柳雪」が座っている。この人のことは事典類に見当たらず、筆者の調査も行き届いていない。現在曲師に一風亭初月がいるが、この人の師匠藤信初子が前名一風亭今若、その師匠が一風亭今子。この今子の夫が柳雪である(芦川淳平編「現代関西浪曲名鑑」『上方芸能』88号の大沢タツ子の項)。

手元の見立番付でたどっていくと、昭和17年、浪曲光栄社版では西方一段目に「巨匠寛永三馬術」とあり、裏面の「営業部と其業者一覧」に「一風亭柳雪 大阪市東区味原町ノ一六九」と出て来る。当時の大御所といえよう。ところが、戦後は昭和22年京阪堂版では西方一段目前頭九枚目となり、昭和25年立志社版では西八段目「旧幹部」の中に入れられ、昭和26年になると立志社版、声明社版ともに名を消している。立志社版ではかわって西方二段目前頭に「一風軒柳新」、西方六段目「有名曲師」に一風亭今吉の名が見える。この頃、柳雪は引退したか没したのであろう。

○桃山神風

西方二段目、「新生座」六人の隣に、前頭桃山神風の名が出てくる。現在の松浦四郎若の師匠松浦四郎の前名である。その改名のいきさつについて、『東西浪曲大名鑑』は以下のようにいう。

所属していた久能部隊での実戦談を、4席の浪曲に仕上げたところ大評判をとり除隊後もこの実戦で売ろうと、部隊長、師団長のお墨付を貰い、大阪府警や、憲兵隊の検閲を受けに行ったところ、「物語りは時局的でいいが、君の芸名がいかん…」と言われた。桃山とは天皇の御陵であり、それに神の風とはなんだ。不敬に当たると言い、即刻変名しなければ、許可は与えられないとの事で、止むなく、昭和16年8月”松浦四郎”と改名して、大阪千日前の愛進館で披露を行った。

ところで、この桃山神風(のちの松浦四郎)は、もとは京山呑風の弟子で呑齋を名乗っていたが、「昭和3年、思うところあって”桃山神風”と改名」(『東西浪曲大名鑑』)したという。今見ている昭和11年の見立番付では、桃山を名乗る浪曲師が他にもいる。神風よりも上の地位の一段目前頭六枚目に桃山天声がいた。芝清之編『東西浪曲大名鑑』の別冊付録「浪曲家各派別系図」によれば、二代目廣澤虎吉の弟子虎月の弟子に桃山天声がいる。桃山天声は見立番付では昭和17年(浪曲光栄社版)にも出て来る。少しとんで、戦後の番付には桃山天声の名は消えている。しかし、昭和22年の番付(浪曲京浜会版)には桃山栄・桃山民声の名が出てきており、桃山という一派が立てられていたようにも思われるのである。

○橋右近

西の三段目「中堅幹部」の連名の中に、橋右近という、浪曲師としては耳慣れない名が出てくる。しかし、演芸史全体から見ると見過ごせない名である。今日、寄席文字橋流の流祖とて知られる人名である。『橋右近コレクション 寄席百年』(昭和五十七年)の「圓朝から小さんまで一寄席裏表」に自身の経歴を記しているが、そのなかには浪曲師時代のことが触れられていない。しかし、『日本芸能人名事典』(1995年〔平成7年〕)には、「大正一〇年〔1921〕吉川小龍の門で龍馬」、翌年落語家に転じ、柳家龍馬、昭和七年柳家さん三、一四年橋右近となると記されている。時期的に重なっており、別人とは思いたい。大河内伝次郎のモノマネで売っていたと伝わるが、落語家の傍ら、旅に出て、関西では浪曲師としても知られていたのであろうか。

○都家三勝

西の二段目のはじめに、「新生座」として五人の名があがっている。その五人目に名を出すのが都家三勝。その息子は、三代目桂米之助の幼馴染で、ともに四代目桂米団治の弟子となり桂米歌子を名乗った。この米歌子はすぐに廃業したのでほとんど忘れられているが(『桂米朝座談 1』「上方落語についての語らい」参照)、その父親・浪曲師都家三勝はこういう地位にあったことを、見立番付は教えてくれる。

○宮川左近

東方、関東の方も少し見てみよう。戦後のラジオ放送などで全国的に知られる人々の名前もずらりと並ぶ。廣澤虎造、木村友衛、浪花亭綾太郎、篠田實……。横綱の宮川左近は三代目。「左近ショー」でのちに名を売り、上方演芸資料館の殿堂入りもしている宮川左近の師匠である。

○廣澤瓢右衛門

その名の通り、飄逸な語りと芸で最晩年に大ブレイクし、昭和49年に大阪府民文化賞を受賞した廣澤瓢右衛門は、この番付ではどこにいるのか。東方の一段目前頭二枚目に名を出しているのである。「長講 瓢右衛門夜話一月の丸いは只一夜」(『藝能東西』創刊号、1975年3月、新しい芸能研究室)の、自身の語るところによれば「昭和三年に大阪を出て、東京に来て睦で働く事になって……」とある。昭和十一年の番付の東方に出ているのは、正しいといえよう。この頃、東京の浪曲界で堂々たる地位を築いていたことがわかる。

○酒井雲坊

東方四段目天才少年酒井雲坊が、のちの歌手村田英雄だというのは、あまりにも有名な話であろう。

はじめに述べたように、見立番付に100%の信頼はおけない。多少の作為、思い違いを含んでいるように見られるが、それを含んだ上で細かく読んでいくと、興味は尽きないのである。

最後に、解説・点検には上方演芸資料館職員の協力を得たことを申し添えたい。

【付録】「東西浪曲大見立」演者一覧

○基本的には、新字体を用いたが、演者名の「廣」「澤」「圓」「實」「當」はそのまま活かした。

演者名	位置・位付け	得意演目 など	演者名	位置・位付け	得意演目 など
寿々木米若	中央、寵将	佐渡情話	ちめの浦弧舟	東外、別格	大和軍歌 の創始者
酒井 雲	中央、巨象	本能寺	春日井梅鶯	東外、明星	義士伝
吉田奈良丸	中央、巻頭	桐一葉	桃中軒如雲	東外、大家	義士伝
天中軒雲月	中央、横綱	杉野の妻	東京浪花節協会	東外、東方総裁	
京山小圓嬢	中央、横綱	佐倉曙	木村友衛	東外、横綱	小金井
富士月子	中央、元勲	赤穂浪士	廣澤虎造	東外、横綱	治郎長
春野百合子	中央、元勲	馬場大盃	篠田 實	東外、大家	紺屋高尾
鼈甲斎虎丸	中央、元勲	春日局	東武蔵	東外、名人	磯打つ浪
東家楽燕	中央、元勲	乃木將軍	津田清美	東外、重鎮	正直車夫
吉田大和之丞	中央、元勲	(二代目 奈良丸)	木村重勝	東外、元老	吉田焼討
井谷政義	中央、勸進元	南地愛進館	京山華千代	東外、名将	文覚上人
花月 吉本	中央、勸進元		雲井式部	東外、名流	紀の国屋
原盛千代	中央、勸進元	天満国光	木村重友	東外、元勲	河内山
			敷島大蔵	東外、元老	女大学

演者名	位置・位付け	得意演目 など
宮川左近	東一、横綱	妹の手紙
浪花亭綾太郎	東一、大関	壺坂寺
玉川勝太郎	東一、関脇	平手造酒
東家楽遊	東一、小結	小松嵐
浪花軒×友	東一、前頭	野狐三次
東家鶴燕	東一、前頭	音吉綱打
廣澤瓢右衛門	東一、前頭	南京松
相模太郎	東一、前頭	一本刀土俵入
林伯猿	東一、前頭	滝の白糸
木村友忠	東一、大幹部	慶安太平記
春日亭清鶴	東一、大幹部	野狐三次
早川燕平	東一、大幹部	神田松
東家三楽	東一、龍虎	義士伝
木村忠衛	東一、龍虎	河内山
松風軒栄楽	東一、名将	伊賀の水月
京山小圓	西外、別格	義民伝
中川伊勢吉	西外、名家	(伊勢夫改 五代目)
藤川友春	西外、名家	(二代目)
浪花節大阪親友 派組合	西外、西方総裁	
梅中軒鶯童	西外、横綱	紀文大尽
天光軒満月	西外、横綱	父帰る
廣澤駒蔵	西外、大家	玉川お芳
八洲東天	西外、宗家	三ヶ月治 郎吉
京山福造	西外、芸豪	塩原太助
京山呑風	西外、重鎮	大西郷
吉田小奈良	西外、別格	大竹重兵衛
前田節子	西外、権威	加藤誠忠録
京山恭為	西外、元老	河内十人斬
京山若丸	西外、元勲	召集令
京山幸枝	西一、横綱	会津小鉄
日吉川秋水	西一、大関	藪井玄以
日吉川秋斎	西一、関脇	奥州奴
廣澤曠海	西一、関脇	伊達騒動
一風亭柳雪	西一、小結	大塩政談
廣澤當昇	西一、前頭	国定忠次
京山雪洲	西一、前頭	妙国寺事件

演者名	位置・位付け	得意演目 など
吉田日の丸	西一、前頭	南部坂
日吉川秋次	西一、前頭	谷風情角力
梅寿軒春風	西一、前頭	海国男児
桃山天声	西一、前頭	江藤新平
岡本玉治	西一、大阪名物フラ /\節	浪花五人男
廣澤虎吉	西一、芸豪	左甚五郎
筑波武蔵	西一、独流	浪曲ドラマ
宮川右近	西一、大関	倉橋伝介
宮川松安	西一、元勲	小谷の方
寿々木米春	東二、精鋭	
梅原秀夫	東二、精鋭	
末廣友若	東二、精鋭	
鼈甲斎若虎丸	東二、精鋭	
木村重行	東二、前頭	
木村松太郎	東二、前頭	
東家楽浦	東二、前頭	
浪花家辰丸	東二、前頭	
港家華柳丸	東二、前頭	
鼈甲斎小虎丸	東二、前頭	
天中軒小入道	東二、前頭	
東家楽声	東二、前頭	
木村友信	東二、前頭	
木村重松	東二、前頭	
木村友春	東二、前頭	
鼈甲斎吉右衛門	東二、前頭	
木村重成	東二、前頭	
東高麗蔵	東二、前頭	
湊川菊水	東二、前頭	
桃中軒南天	東二、前頭	
東家燕左衛門	東二、前頭	
東小武蔵	東二、前頭	
廣澤小虎造	東二、前頭	
木村小重友	東二、前頭	
天中軒宝月	東二、精鋭と花形	
廣澤虎若	東二、精鋭と花形	
岡六弥	東二、精鋭と花形	
青柳一蛙	東二、精鋭と花形	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
木村重好	東二、精鋭と花形	
雲井蓉峰	東二、精鋭と花形	
寿々木米竜	東二、精鋭と花形	
寿々木寿々若	東二、精鋭と花形	
寿々木小米若	東二、精鋭と花形	
天竜軒出雲	東二、新星	
宮川左近坊	東二、少年横綱	
中川伊勢一	西二、新生座	
八洲東郷	西二、新生座	
京山為右衛門	西二、新生座	
宮川吉野	西二、新生座	
都家三勝	西二、新生座	
鼈甲斎大虎	西二、新生座	
桃山神風	西二、前頭	
天光軒小満月	西二、前頭	
中川小伊勢吉	西二、前頭	
日吉川如水	西二、前頭	
吉田一若丸	西二、前頭	
天竜軒大洲	西二、前頭	
藤川小友春	西二、前頭	
廣澤燕	西二、前頭	
筑紫梅鶯	西二、前頭	
廣澤菊春	西二、前頭	
吉田朝日	西二、前頭	
廣澤源氏丸	西二、前頭	
廣澤晴月	西二、前頭	
雲井一富士	西二、前頭	
日吉川秋孝	西二、前頭	
日本孤舟	西二、前頭	
京山左幸枝	西二、前頭	
京山幸城	西二、前頭	
廣澤駒右衛門	西二、前頭	
日吉川斎兵衛	西二、前頭	
藤川月将	西二、前頭	
源牛若丸	西二、独流	
日吉川明水	西二、龍虎	
藤川友司	西二、龍虎	
雲井一声	西二、中堅幹部	
藤川友重	西二、中堅幹部	
日吉川菊水	西二、中堅幹部	
廣澤駒遊	西二、中堅幹部	
京山嘉一	西二、中堅幹部	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
八洲天舟	西二、中堅幹部	
京山春駒	西二、中堅幹部	
大洋洲呑海	東三、中京大家	
鼈甲斎虎吉	東三、前頭	
木村正かり	東三、前頭	
東家小燕	東三、前頭	
天中軒輝月	東三、前頭	
東家左楽若	東三、前頭	
東家楽若	東三、前頭	
東家燕若丸	東三、前頭	
木村重蔵	東三、前頭	
桃中軒若太夫	東三、前頭	
廣澤小虎丸	東三、前頭	
鼈甲斎虎造	東三、前頭	
東若武蔵	東三、前頭	
篠田小實	東三、前頭	
泉錦銀月	東三、前頭	
東家如燕	東三、前頭	
東栄馬	東三、前頭	
都亭三教	東三、前頭	
早川鯉之介	東三、前頭	
雲井水月	東三、前頭	
廣澤若虎造	東三、前頭	
東武蔵大掾	東三、前頭	
木村友造	東三、前頭	
浮世亭雲心坊	東三、モノマネ	
浪花亭綾若	東三、花形	
宮川左燕	東三、花形	
寿々木富士若	東三、花形	
天中軒紫雲	東三、花形	
菊地武雄	東三、花形	
松風軒栄鳳	東三、花形	
松山名月	東三、花形	
四海軒洋鳳	東三、独流	
近松寛	東三、新人	
香川錦昇	東三、別座	
浪花大掾 二代目	東三、進行座	
廣澤玉蔵	東三、進行座	
大倉雲	東三、進行座	
吉田一右衛門	西三、精鋭	
廣澤小虎吉	西三、前頭	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
京山福右衛門	西三、前頭	
吉田久春	西三、前頭	
吉野八重丸	西三、前頭	
日吉川公水	西三、前頭	
吉田和歌丸	西三、前頭	
日吉川水月	西三、前頭	
宮川金丸	西三、前頭	
八洲東月	西三、前頭	
南海秀峰	西三、前頭	
日吉川光信	西三、前頭	
天光軒菊月	西三、前頭	
梅中軒鳳童	西三、前頭	
宮川松雲	西三、前頭	
廣澤駒閑	西三、前頭	
廣澤五駒楽	西三、前頭	
吉田佐賀若	西三、前頭	
天光軒峰月	西三、前頭	
廣澤駒千鳥	西三、前頭	
宮川松陽	西三、前頭	
京山達柳枝	西三、前頭	
春野百太郎	西三、前頭	
京山小太夫	西三、前頭	
八洲福舟	西三、前頭	
京山小愛昇	西三、前頭	
富士月若	西三、前頭	
宮川松童	西三、前頭	
日吉川斎誠	西三、前頭	
梅中軒春月	西三、前頭	
梅中軒春若	西三、前頭	
廣澤駒千鳥	西三、前頭	
吉田奈良三	西三、中堅幹部	
廣澤菊一文字	西三、中堅幹部	
中川晴雲	西三、中堅幹部	
岡本鶴圓	西三、中堅幹部	
廣澤虎夫	西三、中堅幹部	
竹川馬生	西三、中堅幹部	
京山圓左衛門	西三、中堅幹部	
京山嵐	西三、中堅幹部	
橘右近	西三、中堅幹部	
中川鯉昇	西三、中堅幹部	
湊家秀天	西三、中堅幹部	
京山八雲	西三、中堅幹部	
岡本圓造	西三、中堅幹部	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
富士小入道	東四、中京大家	
玉川勝衛	東四、花形と有望者	
松風軒栄司	東四、花形と有望者	
東家燕楓	東四、花形と有望者	
宮川近若	東四、花形と有望者	
宮川近月	東四、花形と有望者	
宮川近衛	東四、花形と有望株	
寿々木吉若	東四、花形と有望者	
吉田奈美丸	東四、花形と有望者	
吉田米丸	東四、花形と有望者	
廣澤虎円	東四、花形と有望者	
京山小為	東四、花形と有望者	
吉田加奈丸	東四、花形と有望者	
寿々木寿々春	東四、花形と有望者	
東家浦太郎	東四、天才少年	
吉田茶良丸	東四、天才少年	
酒井雲坊	東四、天才少年	
東天晴	東四、琴曲	
寿亭福松	東四、別座	
酒井金時	東四、別座	
梅中軒園子	東四、女流花形と有望者	
富士月代	東四、女流花形と有望者	
富士月香	東四、女流花形と有望者	
吉田日奈子	東四、女流花形と有望者	
京山みやこ	東四、女流花形と有望者	
京山美智子	東四、女流花形と有望者	
吉田絹千代	東四、女流花形と有望者	
京山円華	東四、女流花形と有望者	
廣澤若竹	東四、女流花形と有望者	
廣澤香月	東四、女流花形と有望者	
東光子嬢	東四、女流花形と有望者	
春日井おかめ	東四、女流花形と有望者	
吉田一奴	東四、女流花形と有望者	
京山数千代	東四、女流花形と有望者	
吉田奈良嬢	東四、女流名花	
桃中軒桃子	東四、女流名花	
大友義子	東四、女流名花	
木村八重子	東四、女流名花	
浪越菊子	東四、女流名花	
園田八千代	東四、女流名花	
春日鶴子	東四、女流名花	
高峰華枝	東四、女流名花	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
立花文子	東四、女流名花	
京山円嬢	東四、別座	
吉田丸子	東四、別座	
美當軒峰月	西四、大和軍歌	
日吉川斎誠	西四、花形と有望者	
日吉川貞夫	西四、花形と有望者	
吉田秀丸	西四、花形と有望者	
吉田勝丸	西四、花形と有望者	
京山若幸枝	西四、花形と有望者	
京山幸水	西四、花形と有望者	
吉田千代若	西四、花形と有望者	
日吉川秋一	西四、花形と有望者	
梅中軒錦童	西四、花形と有望者	
梅中軒華童	西四、花形と有望者	
春野暁	西四、花形と有望者	
春野日の出	西四、花形と有望者	
春野若一	西四、花形と有望者	
富士日昇	西四、花形と有望者	
吉田日の若	西四、花形と有望者	
藤川司郎	西四、花形と有望者	
大蔵若雲	西四、花形と有望者	
日満日照	西四、花形と有望者	
八洲東陽	西四、花形と有望者	
満州日出丸	西四、軍事浪曲	
日満友子	西四、女流花形と有望者	
京山円華	西四、女流花形と有望者	
京山円月嬢	西四、女流花形と有望者	
廣澤虎千代	西四、女流花形と有望者	
京山好千代	西四、女流花形と有望者	
京山花丸嬢	西四、女流花形と有望者	
宮川松枝	西四、女流花形と有望者	
宮川安子	西四、女流花形と有望者	
雲井武子	西四、女流花形と有望者	
岡本梅千代	西四、女流花形と有望者	
岡本小梅	西四、女流花形と有望者	
京山満枝	西四、女流花形と有望者	
吉田奈美子	西四、女流花形と有望者	
春野華百合	西四、女流花形と有望者	
日満妙千代	西四、女流花形と有望者	
市川富久千代	西四、女流花形と有望者	
廣澤菊路	西四、名家二代目	
日吉川貞水	西四、名花二代目	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
京山鱗昇	西四、名家二代目	
浪花家小虎丸	西四、名家二代目	
京山小円太夫	西四、別座	
廣澤若菊	東五、横綱	お里沢市
京山円千代	東五、大関	南部坂
天中軒女雲月	東五、関脇	義士伝
武蔵野栄華嬢	東五、小結	治郎長
天中軒月子	東五、前頭	義士伝
富士野たか子	東五、前頭	義士伝
河合道子	東五、前頭	人情談
楠葉子	東五、前頭	乃木將軍
吉田艶子	東五、前頭	人情談
廣澤女虎造	東五、前頭	治郎長
岡本小梅嬢	東五、前頭	
巴まり子	東五、前頭	
旭輝子	東五、前頭	
京山美代子	東五、前頭	
京山幸枝嬢	東五、前頭	
松風軒村子	東五、前頭	
桂月代	東五、前頭	
廣澤一菊	東五、前頭	
廣澤久菊	東五、前頭	
天中軒桂子	東五、前頭	
鈴木照子嬢	東五、天才少女	生れる悲哀
京山女小圓	東五、独流	赤垣源蔵
寿々木米若嬢	東五、名花	佐渡情話
寿々木若子	東五、名花	吉田御殿
寿々木女米若	東五、立体浪曲	追分しぐれ
女雲右衛門	東五、三人会	義士伝
岡本梅嬢	東五、三人会	探偵美談
旭市子	東五、三人会	義士伝
巴うの子	東五、独流	玉菊灯籠
吉田奈良千代	西五、横綱	義士伝
日満妙子	西五、大関	腹切魚
日本菊子	西五、関脇	国定忠次
櫻武子	西五、小結	人情伝
浪花吉奴	西五、前頭	長崎土産
前田錦子	西五、前頭	女大学
前田八重子	西五、前頭	小村外相
京山円菊	西五、前頭	団十郎
廣澤若子	西五、前頭	垣見左内

演者名	位置・位付け	得意演目 など
愛之園子	西五、前頭	越後伝吉
宮川糸子	西五、前頭	
富士裾野	西五、前頭	
前田節美	西五、前頭	
富士三保子	西五、前頭	
秩父栄子	西五、前頭	
春野さくら	西五、前頭	
廣澤静子	西五、前頭	
富士月野	西五、前頭	
廣澤小夏菊	西五、前頭	
岡本梅香	西五、前頭	
菅原梅子	西五、盛花	石童丸
春野若百合	西五、三人娘	
春野百合嬢	西五、三人娘	
春野百合香	西五、三人娘	
大和式部	西五、大家	藤十郎の恋
京山好子	西五、芸豪	高野女人堂
春野笹百合	西五、雷の花	
吉田日奈子	西五、雷の花	
吉田奈々子	西五、雷の花	
前田ぼたん	西五、雷の花	
廣澤香菊	西五、浪謡曲	新作十種
浪花亭峰吉	東六、検査役	
一心亭辰雄	東六、検査役	
春日亭清吉	東六、検査役	
東家悟楽齋	東六、行司	
寿々木米造	東六、行司	
京山幸玉	東六、行司	
京山愛昇	東六、行司	
吉田元女	東六、行司	
桃中軒雲右衛門	東六、宗家・重鎮・中老	
桃中軒白雲	東六、宗家・重鎮・中老	
東雲閣呑風	東六、宗家・重鎮・中老	
東家小楽燕	東六、宗家・重鎮・中老	
鼈甲齋鶴丈	東六、宗家・重鎮・中老	
早川辰燕	東六、宗家・重鎮・中老	
浪花亭奴	東六、宗家・重鎮・中老	
雲井雷太郎	東六、宗家・重鎮・中老	
寿々木純造	東六、宗家・重鎮・中老	
寿々木馬生	東六、宗家・重鎮・中老	
桃中軒峰右衛門	東六、宗家・重鎮・中老	
蛟龍齋青雲	東六、宗家・重鎮・中老	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
桃中軒雲太郎	東六、宗家・重鎮・中老	
港家扇蝶	東六、宗家・重鎮・中老	
山川八造	東六、宗家・重鎮・中老	
筑波雲	東六、宗家・重鎮・中老	
廣澤當円	東六、宗家・重鎮・中老	
廣澤虎遊	東六、宗家・重鎮・中老	
廣澤菊水	東六、宗家・重鎮・中老	
日吉川秋平	東六、宗家・重鎮・中老	
岡本鶴丸	東六、宗家・重鎮・中老	
藤川桑春	東六、宗家・重鎮・中老	
京山花丸	東六、宗家・重鎮・中老	
五島淡海	東六、宗家・重鎮・中老	
末廣亭辰丸	東六、宗家・重鎮・中老	
大和声美	東六、宗家・重鎮・中老	
京山秋子	東六、女流元老と重鎮	
九重泰子	東六、女流元老と重鎮	
廣澤夏菊	東六、女流元老と重鎮	
浪花家虎筆	東六、女流元老と重鎮	
国津弁天	東六、女流元老と重鎮	
浪花八重子	東六、女流元老と重鎮	
篠田女實	東六、女流元老と重鎮	
坂本静子	東六、女流元老と重鎮	
木村茉莉	東六、女流元老と重鎮	
妻川君代	東六、女流元老と重鎮	
安藤義子	東六、女流元老と重鎮	
福岡 川丈	西六、頭取	
名古屋 岡崎	西六、頭取	
名古屋 早川	西六、副頭取	
東京 松留	西六、副頭取	
新潟 本間	西六、副頭取	
香川 高木	西六、副頭取	
広島 千駒	西六、副頭取	
岡山 横山	西六、副頭取	
大阪 千日前 太田	西六、差添人	
神戸 上田事 庄村	西六、客員	
東京 清沢	西六、賛助員と相談役	
門司 高田	西六、賛助員と相談役	
名古屋 二の宮	西六、賛助員と相談役	
広島 宮本	西六、賛助員と相談役	
北海道 土井	西六、賛助員と相談役	
福岡沢井	西六、賛助員と相談役	
呉 佐々木	西六、賛助員と相談役	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
北海道 菅	西六、賛助員と相談役	
名古屋 鈴木	西六、賛助員と相談役	
全（名古屋）安藤	西六、賛助員と相談役	
岡山 三木	西六、賛助員と相談役	
八幡 新谷	西六、賛助員と相談役	
福山 藤本	西六、賛助員と相談役	
大阪 田中	西六、賛助員と相談役	
神戸 岡田	西六、賛助員と相談役	
和歌山 岩井	西六、賛助員と相談役	
松阪 堀	西六、賛助員と相談役	
大和 宮崎	西六、賛助員と相談役	
四国 宮竹	西六、賛助員と相談役	
播州 黒田	西六、賛助員と相談役	
大阪 當麻	西六、賛助員と相談役	
堺 富岡	西六、賛助員と相談役	
大阪 三車	西六、賛助員と相談役	
京都 真野	西六、賛助員と相談役	
東京 松竹 向山	西六、顧問	
南 桑一	西六、検査役	
飯田五郎	西六、検査役	
出井福松	西六、検査役	久丸事
酒井寅吉	西六、検査役	四代伊勢 吉事
楽燕会 横田	著名支配人と営業主任	
米若会 島竜	著名支配人と営業主任	
虎丸会 辻	著名支配人と営業主任	
前雲月会 野田	著名支配人と営業主任	
左近会 杉浦	著名支配人と営業主任	
節子会 今村	著名支配人と営業主任	
百合子会 糸田	著名支配人と営業主任	
雲月会 永田	著名支配人と営業主任	
雲会 本田	著名支配人と営業主任	
奈良丸会 井川	著名支配人と営業主任	
重友会 鈴木	著名支配人と営業主任	
幸枝会 楠	著名支配人と営業主任	
鶯童会 藤沢	著名支配人と営業主任	
月子会 吉岡	著名支配人と営業主任	
小圓嬢会 小馬	著名支配人と営業主任	
奈良千代会 岡本	著名支配人と営業主任	
若菊会 吉田	著名支配人と営業主任	

演者名	位置・位付け	得意演目 など
満月会 藤原	著名支配人と営業主任	
大正座 中野	著名支配人と営業主任	
国光 飛田	著名支配人と営業主任	
全（国光） 小山	著名支配人と営業主任	
福真亭 寺前	著名支配人と営業主任	
愛進館 柳田	著名支配人と営業主任	
廣澤館 前田	著名支配人と営業主任	
雲会 田中	著名支配人と営業主任	
岡崎興行社 牧田	著名支配人と営業主任	
睦会 浪花家	著名支配人と営業主任	
二葉館 井上	著名支配人と営業主任	

あとがき

上方演芸資料館はどうなったのですかと、ときどき聞かれます。「設立当初からは、縮小されましたが、ちゃんとありますよ」。収蔵庫の中で行われる資料整理は、外からは見えません。その見えないところが多少なりとも表に出るように、年報の作成を提案しました。もちろん「お役所」の「報告書」であります。が、内部が透けて見えるものであればと願っています。次年度、次々年度と続けるうちに、より良い（中身があって、しかも読みやすい）報告書に育つよう祈っています。

（大阪府立上方演芸資料館資料整理部会長 荻田 清）